

学術論文の「パッケージング」

——投稿作法を考える

小野 浩

(テキサス A&M 大学准教授)

編集委員・レフェリーの立場から論文を審査する仕事を日ごろから行っている。ここでは、今までの経験を活かして、投稿のノウハウについて考えてみたい。

研究者は、できるだけ水準の高い学会誌に投稿して、実績を残さなければいけない。素晴らしい研究アイデアがあっても、その結果を世の中に伝える手段がなければ評価につながらない。審査を重ねて採択された論文は、それなりに世の中にインパクトを与える。

ここで紹介する手法をすでに取り入れている方もたくさんいるだろう。投稿の経験を積む上で必然的に賢くなっていくものである。しかし、無意識のうちに培ったスキルやノウハウを体系的に整理して、文書化することも有意義だと思う。

投稿は、場当たりに挑むと成功率は低い。受験勉強のように、傾向と対策を慎重に練って、計画的にかつ戦略的に取り組む必要がある。一方で投稿の手ほどきをする記事は意外と少ない¹⁾。本稿を通じて、読者の方々が投稿論文の採択率を少しでも高めることができれば幸いである。

パッケージングという考え方

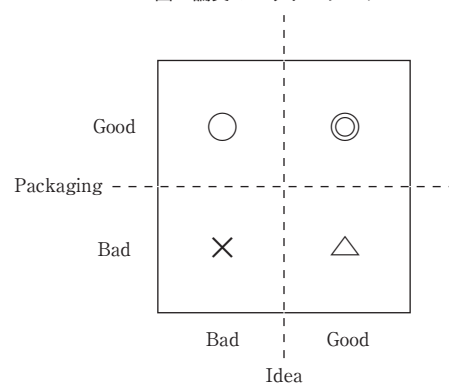
研究者の使命とは、第一に面白い研究アイデアに取り組み、しかるべき結果を出すことである。しかしそこから先の道りは更に重大である。研究成果を発表して、一人でも多くの方に知ってもらいたい。即ち投稿論文とは、研究成果を世の中に売り込む重要な媒体になるわけだ。

研究アイデアとその成果を取りまとめ、論文というかたちに「商品化」する一連の流れを（マーケティング用語を借りて）「パッケージング」と呼ぶことにする。パッケージングでは、小さいパーツから商品を組み立てていくという発想ではなく、全体像をつかんだ上で、ターゲットを絞り込み、商品の旨みを活かし

ながら、戦略的に売り込むノウハウが求められる。

研究アイデアの良し悪しを横軸に取り、パッケージングの良し悪しを縦軸にとると下の図のようになる。無論×で示すような、両方が悪い論文は研究として没として終わってしまう。最も評価が高いのは、図の◎で示すように、研究アイデアとそのパッケージングの両方に優れた論文である。こういう論文は読み甲斐があり、引用回数も多い論文になる。しかし、◎の論文は意外と少なく、ほとんどの論文は次の二つに区分されることになる。

図 論文のパッケージング



この二区分とは、○で示す「研究アイデアは良くないけどパッケージングが良い論文」と、△で示す「研究アイデアは良いけどパッケージングが良くない論文」になる。編集委員がこの二つに迫られたとき、どちらを選ぶだろうか？ それは、前者になってしまうことが多い。

どんなに優れた商品であっても、デリバリーに失敗したらその商品は死んでしまう。マーケティングではこの類の失敗例は無数にある。

投稿論文の世界でも、どんなに良いアイデアであ

ろうと、それをうまく表現して読者に伝えることができなければ論文は死んでしまう。パッケージングのしかたによって勝敗が分かれてしまう。悔しいことだ。それだけ論文のパッケージングは重要なのである。

学会誌を絞り込む

下準備は、まずターゲットを絞り込むことから始まる。具体的には、学会誌を絞り込んでから論文を書き始めることを薦める。論文を書き終えてから学会誌を選ぶのでは手遅れだ。

学会誌を絞り込むとその対象となる読者層がより鮮明に分かってくる。どの程度の専門性が求められるのか？ その学会誌の特徴は何か（理論、実証、学派など）？ アメリカ系か、欧州系か？ 過去にどのような論文を掲載してきたか？ 情報収集をつぶさに行い、その学会誌に求められる基本条件を整理する。とりわけ、編集長・編集委員を知ることで、大体その学会誌の傾向が読み取れる。

特徴が分かったら、それに合わせて論文をカスタマイズする。引用文献、研究手法、研究結果の伝え方などを調整しながら論文を作成する。

オーディエンスを知らずに論文を書くことはできない。ターゲットを絞り込むことは投稿の第一歩と考えるべきである。

書き下ろしを優先

論文を書き始めるときは、まず森を描いてから、木を整理するように心がける。その逆は避けるべきだ。まず大きな筋道を立てて、ストーリー（下記参照）を書き上げてから、細かい部分を整理するようにする。書いている最中は、校正しない。綴りや文法など、細かい箇所を気にして中断しながら書くと、思考が止まってしまう。アイデアがあったらまず書き下ろすことを優先させる。細部は後できちんと直せばいい。

クラシック音楽との共通点

チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を聴かれたことはあるだろうか？ この曲は出だしから眠気を吹き飛ばすようなすさまじい迫力がある。第一楽章のオープニングは、クラシック音楽にあまり詳しくない人でも、一度聴いたら忘れられないような強い印象を与える。続く第二楽章は、ややゆっくりと始まり、美しいフルートの音色に吸い込まれていく。最後の第三楽章では再びテンポが速くなり、気分が高まったところで結びを迎える。この協奏曲を最初から最後まで聴くと約30分である。決して短い時間ではない。しか

し、聴いていて退屈する人はあまりいないだろう。

イントロダクションが勝負

一昔前、シカゴ交響楽団の（元）音楽監督・指揮者として有名なダニエル・バレンボイム氏の講義を聞きに行ったことがある。バレンボイム氏は、音楽は第一音符から始まると熱く語っていた。最初の音符が響いた瞬間に沈黙が壊され、聴衆の注目を引く。このため最初の導入部分はそれだけ大切であることを繰り返し主張していた。

さて、音楽と同様、論文は出だしが勝負になる。オープニングは客を引っ掛ける「フック」になる。イントロダクションを読み終えたら、その先を読みたくないような作品が理想である。この導入部分で引き込めなかったら、オーディエンスを失ってしまう。実にもったいない。

実例を使ったほうがわかりやすいので、いくつか紹介しよう。まず一つの手段として、まだ解決されていない問題ないしパズルから始める。前述のように、論文は興味深い研究アイデアに着目することに越したことはない。面白いアイデアがあったら、次にそれを面白い質問に置き換える。例えば Guiso, Sapienza, and Zingales (2006) の論文は、タイトルからして興味を引く：“Does Culture Affect Economic Outcomes?” そしてこの論文は次の文章から始まる：

Until recently, economists have been reluctant to rely on culture as a possible determinant of economic phenomena.

経済学では、最近まで文化を扱うことをためらってきた、というジレンマから入っていく。なるほど、まだ解決されていないパズルに着目するわけだ。この最近までという表現をフックに使い、そこから読者を引き込んでいく。非常に有効な表現力である。

インパクトの強いオープニングとしては、2013年にノーベル経済学賞を受賞された Fama (1965) のイントロダクションを紹介したい。

For many years economists, statisticians, and teachers of finance have been interested in developing and testing models of stock price behavior. One important model that has evolved from this research is the theory of random walks. This theory casts serious doubt on many other methods for describing and predicting stock price behavior—methods that have considerable popularity outside the academic world. For example, we shall see later that if the random walk theory is an

accurate description of reality, then the various "technical" or "chartist" procedures for predicting stock prices are completely without value. (p.55)

まず最初の文章では問題を提起する。そして、最後の文章では、もしこの理論が正しければ、株価を予測する今までのテクニックは全く無意味になってしまうとまで言い切る。かなり挑発的な発言であるゆえ思わずその先を読みたくなくなってしまう（もっとも、このテクニックはノーベル賞級のFama教授だからこそ活かせるのであり、普通の研究者には真似できないかもしれない）。

論文の主旨をそのまま簡潔に伝えるテクニックもよく使われる。例えば、Prendergast (1999) のオープニングは、次の文章から始まる：

Incentives are the essence of economics. (p.7)

これほど簡潔だと、メッセージが明快に伝わってくる。論文の細かいところは忘れてしまっても、このメッセージだけは必ず記憶に残る。

また、論文の主旨をそのまま読者に問いかける例もある。Card and Krueger (1994) の有名な最低賃金の論文は次の質問から始まる。

How do employers in a low-wage labor market respond to an increase in the minimum wage?

いずれも有効なテクニックである。

最後に、学術論文の域を離れるが、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』を見てみよう。宣言の有名なオープニングは：

The history of all hitherto existing society is the history of class struggles.

最初の一行からのめりこんでいく。宣言自体緊迫感に満ちた傑作である。そして、最後の一行も迫力がある。

Working men of all countries, unite!

僅か30頁の宣言で歴史を塗り替えてしまったのだから、その衝撃は計り知れない。

このように、良い作品とは、音楽であれ投稿論文であれ、出だしからオーディエンスを引き込んでいくような効果がある。ところが、この基本ルールに従わない論文は案外多い。眠気を覚ますどころか、眠気を誘うような論文をよく目にする。

悪い例をここで紹介するつもりはないが、一般的な傾向として、森の話がなくていきなり木の話から始まってしまふ論文が多い。自分の狭い研究領域に没頭して、それ以外の世界がよく見えていない。オープニングから小さく始まってしまうと、その先を読む気がしない。それだけイントロダクションは全体構成の中

で重要な位置づけを占めるわけだ。

ストーリーを組み立てる

今まで指導教官や編集委員の方から、いろいろと投稿のアドバイスを受けてきた。最も印象的だったのが、ある学会誌の編集長から教わった「フィクションを読みなさい」という言葉だった。確かに、フィクションから学べることは多い。上述の通り、オープニングが勝負というのもその一つである²⁾。ここでは更に、ストーリー性の重要性について述べてみたい。

フィクションには起承転結があり、読んでいて面白い。一方、学術論文は、問題提起に始まり、仮説構築、仮説検証、結びと考察というように、その構成はかなりがんじがらめになっている。しかし、この制約の中でも、独創性を活かしてストーリーを取り入れ、その語り方を工夫することは十分可能である。ストーリーを組み立てて、読者を引きつけることは、パッケージングの過程の中で最も重要なポイントになると考えられる。

ストーリー性に優れた論文の例は数々挙げられる。その中でも有名なCard and Krueger (1994) の最低賃金の論文を見てみよう。この論文はまず前述のようにオープニングからして素晴らしい。全文を紹介することはできないが、イントロダクションは未解決のパズルから始まる。最低賃金を上げると失業者が増えると言われてきたが、この関係を検証した研究は全て失敗に終わっている。このように読者の好奇心をくすぐった上で、ニュージャージー州の最低賃金の「実験」と、なぜそれが面白い設定なのかを紹介し、ストーリーを組み立てていく。非常に読みやすい論文である。

優れたストーリー性の論文では、Krueger and Mas (2004) も挙げられる。この論文では、労働争議が製品の品質に与える影響を、ブリヂストンのタイヤ工場のデータを使って検証している。具体的には、タイヤ工場で起きたストライキのタイミングと不良タイヤの発生確率の因果関係を暴こうとしているわけだ。私はセミナーに参加して研究発表を直に聞くことができた。Krueger教授は、冗談まじりにこの研究をdetective economicsの一例として紹介していた。なるほど、経済学を使って、探偵のように事件を解決するわけである。この類の研究はベストセラーになった*Freakanomics*で幅広く紹介されているので、興味のある読者は本を参照されたい。

読者・審査員の立場から考える

毎日の仕事で論文をたくさん読まれる方は多いだろう。全ての論文に目を通すことは当然できない。それではどの論文を見て、どの論文を捨てるのか？ 目ばしい論文を選ぶときの基準を考えたことはあるだろうか？ ここでは、読者の立場から論文の取捨選択の手順を考え、そのまま論文に活かすコツについて述べてみたい。

まず、川口他（2005）でも触れているように、要約、イントロダクションと結論しか読まない読者が多い。自慢できることではないが、私自身その通りである。論文の最初から最後まで読むことはめったにない。

要約は命

要約（アブストラクト）で関心を引けなかったら論文は捨てられてしまう。貴重な時間を費やしてその先論文を読むかどうかは、要約にかかっている。実際に、以前私が（アメリカの学会で）参加した「getting published」というワークショップでも、「要約は論文の命」とこっぴどく言われた。要約を書くことだけを手ほどきするワークショップもあるくらいだ。

ここでも読書の立場から考えて見よう。学会誌や蔵書のデータベースがインターネット上で普及しつつある今日、論文を検索すると、全文は見られなくても要約は読めるようになっている。このため、出版業界では、要約は「teaser」と呼ばれている。全文を読む前に、小出しとして「購買意欲」と好奇心をくすぐる広告のような位置づけになっているわけだ。

論文を書き終えてから、最後に付け足すような感じで要約を書くのでは足りない。なるべく多くの読者に読んでもらえるためにも、要約は何回も書き直し、吟味した上で提出すべきである。

Topic sentence で主題を伝える

更に読者の立場から考えて見よう。要約で読む気になり、イントロダクションで関心を引き、実際の論文を読み始めたとき。その場合、どこに目が行くだろうか？ 多くの読者は、topic sentence に注目しながら論文を読み飛ばしていくことが多い。ここでいうtopic sentenceとは、段落の主題を述べる文章で、通常段落の第一文目になる。現に優れた論文とは、topic sentenceだけを読めば、その主旨が概ね伝わってくる構成になっている。逆に、段落の頭ではないところで主題を述べた場合は、そのメッセージを見落とされてしまう可能性は高いだろう。

書き手からすれば、読み飛ばす読者がいることを前提として考え、段落の最初の文章で主旨を伝える工夫が求められる。論文を書き終えた段階でも遅くはない。読み直して、段落の頭に主旨を明快に伝えるtopic sentenceを持つてくるように注意すべきである。

なお、段落はメッセージ一つに限る。仮にその段落の中で複数のメッセージが含まれている場合は、その段落を書き直すか、または新しいメッセージが始まる場所で改行して、次の段落から始めるべきだ。

一般に、長い段落が読みづらいのは、複数のメッセージが込められていて混乱を招くからだ。玄田（2005）が説明するように「一段落はどんなに長くても、息を止めて読み始めて苦しくならない時間内で読める程度」が良い目安となる。段落が長引くようであれば、改行を使って仕切りなおしたほうが主題は的確に伝わる。

審査のデフォルトはリジェクト

論文の審査を依頼される方は多いだろう。ただでさえ多忙な日課の上、（多くの場合）無償奉仕で論文を査読するわけだから、必ずしも前向きになれない方も少なくないだろう。査読論文とは、このような芳しくない状況の中で審査されると思ったほうが賢明だ。

審査のデフォルトはリジェクトとして考えるべきだ。とりわけ近年は投稿論文の数も増え、競争も激しくなっている。また学者は、仕事から研究を（建設的に）批判するように鍛えられている反面、惰性で厳しく評価する傾向が強い。ことに優れた研究とは、数々の批判に耐えたものが生き残る構図になっている。審査員が論文を読む場合、アクセプトする理由より、リジェクトする理由を見出す習性が強く働いてしまう。

かくして書き手はアクセプトされる確率を上げると同時に、リジェクトされる確率を下げることを目指す。言い換えれば、リジェクトされる言い分をできる限り無くす努力が求められる。

玄田（2005）が指摘するように、誤字脱字は絶対に禁物である。論文を速やかに読もうとしているときに凡ミスで中断されると、誰でもうんざりする。つまらない理由がかさなって、審査員を不快な気にさせるのは極力避けたい。

文献レビューがずさんなもの恥ずかしい。しかるべき文献が引用されていない論文をしばしば見かける。引用文献は、参考文献リストを見れば一目瞭然である。抜けている文献は発見しやすく、批判のターゲットになりやすい。

私も玄田（2005）と同様に、論文をしばらく「寝か

せる」ことを強く薦める。論文が完成したら、できるだけ多くの場で発表してフィードバックを得るべきである。セミナーや学会で発表を繰り返し、切磋琢磨を重ねた上で洗練された論文を投稿する。

論文に締め切り日がある場合は、「寝かせる」時間をあらかじめ組み込んでおくことを薦める。締め切りのぎりぎりに仕上げるのではなく、少し余裕を持って仕上げるようにする。私はなるべく締め切りの一週間くらい前には論文を書き上げるようにしている。気分的にもゆとりができ、締め切りまでにいろいろと微調整をしたり、凡ミスを訂正することができる。リジェクトされる理由を少しでも減らすには、この程度の努力が必要である。

改訂は慎重に

アクセプトよりリジェクトされる可能性が高いのが投稿の現実である。ぜひ若い研究者の方々に伝えたい——リジェクトされても気を落とさないでほしい。多数の論文を投稿して成功を収めている研究者は、それを上回る数のリジェクトを経験しているのが現実である。粘り強く挑んでほしい。

さて、こういう厳しい環境の中で、論文を改訂する機会が得られるのは願ってもいないことである。次のラウンドまで進むチャンスを獲得したわけだ。万難を排して取り組むべきだ。

改訂のコツは、まずどんなに突拍子な意見やリクエストであっても、審査員に対して十分敬意と感謝の気持ちを示した上で丁寧に回答する。審査員の機嫌を損なったら論文の運命は危うい。その分編集長・審査員宛の改訂メモは、極めて慎重に作成しなければいけない。

一方で、審査員に振り回されるのも良くない。もっともコメントに同意できない場合でも、審査員の立場を尊重しつつ、自分の主張を貫くことはできる。改訂メモの書き方のコツは、このように相手の気持ちを汲み取りながら、自分の言い分を通す微妙なニュアンスと表現力が求められるのである。

日本研究もパッケージング次第

日本人が行う実証研究は、その関心テーマとデータの特徴からして日本研究になる傾向が強い。海外のオーディエンスは日本研究には興味がないという理由から、英文の学会誌に投稿されない方もいるようだが、あきらめないでほしい。日本研究もパッケージング次第で海外に放つことは十分可能である。

英文の学会誌に投稿する場合は、(前述のように)

第一手段として学会誌を絞り込むことから始まる。学会誌の系統がつかめたら、そのオーディエンスを対象に、戦略的に論文をカスタマイズしていく。

アメリカ人の読者は、必然的にアメリカの社会現象に引かれる。アメリカ研究に背けて、日本研究に注目してもらうには、まず冒頭で、なぜ日本の現象が面白いのかを売り込む努力が必要である。日本人の読者が(例えば)ドイツの労働市場の記事に出くわした場合、よほどの理由がなければその記事を読まない方が多いだろう。海外の読者をターゲットにした場合、それだけ余分の努力が求められることは十分覚悟しなければいけない。ここでは応用例として、アメリカの学会誌に、日本の終身雇用に関する論文を投稿するケースを考えて見よう。

日本人を対象にしている場合、終身雇用といえば大体の人はわかってくれる。しかし海外に向けて書いている場合は、なぜ終身雇用という現象が面白いのかを説明しなければいけない。欧米のデータと比較して、日本を位置づけるような工夫も必要になるかもしれない。

例えば、日本は内部労働市場が成熟しており、先進国の間でも離職率が低いので注目されている。終身雇用は日本的雇用慣行として、昔から注目されてきた、等々しかるべき文献を引用して、日本特有な現象であることを説明する。一方で、長期雇用が近年崩れつつあるといわれてきたが、それを決定的に示す実証研究は数少ない。まだ解決されていない問題として紹介して関心を引き、ストーリーを組み立てていく。フィクションのように、ここまで読んでもらえたらその先を読みたくするような工夫を取り入れる。

パッケージングの日米格差

本稿でも紹介したように、投稿のパッケージングには、要約とイントロダクションの重要性に始まり、読者をひきつけるような工夫など、いろいろなテクニックが要求される。熟すのは容易ではない。

私の経験からして、アメリカ人はパッケージングが抜群にうまい。とりわけアメリカ人が大学院で投稿の訓練を受けているわけではない。日ごろの生活習慣からして、自分の考えていることをしっかり表現する力が自然に身につけているのかもしれない。ただし時には売込みが激しすぎる論文を見かけ、うんざりすることもある。

比べて日本人(また一部のヨーロッパ人)は控えめの文化性がそのまま論文に反映されてしまうのか、文章にあまりめりはりがなく、フラットな印象を受け

る。売り込みも弱い。とりわけ英語の論文になると更に表現が萎縮され、硬い文章になってしまう。全体の構成もデータ、手法、結果を記述的に列記したようなドライな論文が多く、ストーリー性に欠ける。文法、句読法、綴りといった細かい部分は正しくても、全体の構成とバランスが成り立っていない。

投稿の成功率を高めるには、小さい部品に注目するより、もう少し論文全体のパッケージングという考え方を投稿に取り入れることが求められるだろう。

*本稿作成にあたり、米オレゴン州立大学の Alexis Walker 教授（故人）から貴重なアドバイスを頂いた。心から感謝を申し上げますと共に、ご冥福をお祈り致します。

- 1) 投稿の作法に関する特集は、本誌の 2005 年 11 月号を参照していただきたい。
- 2) 私見になって恐縮だが、フィクションで有名なオープニングとしては、例えば、『アンナ・カレーニナ』（トルストイ）、『高慢と偏見』（オースティン）、『ロリータ』（ナボコフ）、『ライ麦畑でつかまえて』（サリンジャー）、『異邦人』（カミュ）などが挙げられる。

参考文献

Card, David and Alan B. Krueger (1994) "Minimum Wages

and Employment: A Case Study of the Fast-Food Industry in New Jersey and Pennsylvania." *American Economic Review* 84: 772-793.

Fama, Eugene F. (1965) "Random Walks in Stock Market Prices." *Financial Analysts Journal* 21: 55-59.

Guiso, Luigi, Paola Sapienza, and Luigi Zingales (2006) "Does Culture Affect Economic Outcomes?" *Journal of Economic Perspectives* 20: 23-48.

Krueger, Alan B. and Alexandre Mas (2004) "Strikes, Scabs, and Tread Separations: Labor Strife And The Production of Defective Bridgestone/Firestone Tires." *Journal of Political Economy* 112: 253-289.

Prendergast, Canice (1999) "The Provision of Incentives in Firms." *Journal of Economic Literature* 37: 7-63.

川口大司・佐藤博樹・中窪裕也・佐藤厚（2005）「座談会 投稿の作法」『日本労働研究雑誌』No.544. 43-53.

玄田有史（2005）「投稿のすすめ——私的経験から」『日本労働研究雑誌』No.544. 54-59.

おの・ひろし テキサスA&M大学大学院社会学研究科准教授。最近の主な著作に Ono, Hiroshi and Kristen Schultz Lee. (2013) "Welfare States and the Redistribution of Happiness." *Social Forces* 92: 789-814。学会誌 *Sociology of Education* などの編集委員を複数経験。労働社会学、労働経済学専攻。